

開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



池田 誠一

【9】武家地と寺町…囲いのない町

1 武士と寺社

近世の城下町は、計画的に、①武家地、②町人地、③寺社地に区画されていました。名古屋の場合は、町人地としては1等地の碁盤割地区と街道沿いが指定されました。当時居住に選択権があるのは町人であり、城下繁栄のためにも町人が大切にされたのでしょう。

一方居住地が藩で決められたのは、武士と寺院、神社でした。神社は清須越しの朝日神社が碁盤割の南端に、後は城下にあった神社が町の周辺に移されています。では一番大きな勢力だった武士、政治と対立する可能性もあった寺院はどうだったのでしょうか。今回はこの二大勢力が名古屋城下にどのように配置されていたかをみてみたいと思います。

2 武士の町と寺の町

(1) 武家地

武士は城を守り城下を守る存在として、城郭の周囲を囲んで配置されるのが常でした。しかし平和の時代を展望した時、武士は城下の中心的存在ではなくなっていました。

名古屋の城下では武士は、藩主直近の重臣を除くと、堀の外に、碁盤割の町人町を囲むように配置されました。武士相互には階級性

がしっかりしているため、その位によって藩主を中心に順に、その面積を遞減しつつ、扇状に配置されています(図1)。藩主を直接支える重臣は三の丸内でしたが、その次のクラスからは城の東から、南、西へとまわっています。中でも東側の城と直結する地域には、三の丸に次ぐ上・中級武士などが石高の高いものから低いものへ、その面積を微妙に変えています。その他の中・下級武士は、碁盤割の東側の山口地区から、東南の小林地区、西南の広井地区、西側の幅下地区へと碁盤割地区を囲みました。そして城下の外郭は、足軽など組をつくるクラスの居住地になりました。

これらの配置が町人の碁盤割地区を囲んでいるため、町人を監視するためだったという人もいます。しかし城下町形成の過程から見

武家屋敷規模 寛政12年(1800)

900～600石	900～600坪
500～250石	600～500坪
249～100石	500～300坪
99～ 30俵	300～150坪
御目見以下御徒格以上	200～150坪
御御差頭より惣物書	140～110坪
惣同心已下	100～ 80坪
御中間	50坪

(名古屋市鶴舞中央図書館蔵「首藤氏覚書」より)

図1 江戸後期の尾張藩の武士の石高と屋敷地(文献①)

れば、武士中心から町人中心へと移ったからであり、武士階級が町人や町全体を守っている形と見たほうが素直ではないでしょうか。

(2)寺町

寺院は、当時は領主に対して対立する可能性のある存在でした。そのため多くの城下では町の中心部を外し、周辺部に集中または環状に配置されています。

名古屋では城下の南端に、碁盤割地区から移された万松寺を始め清須越えの大きな寺院等が集められ、大きな寺町が形成されました(図2)。この地は、城から熱田さらには東海道へとつながる街道沿いになります。また城下の東南部にもすこし規模の小さい寺町が作られました。そして前者は南寺町、後者は東寺町と呼ばれました。この2つの町への配分は、統制上でしょうか、宗派単位です(図3)。ただし真宗は当初、城下には入れませんでした。当時は一向一揆が多発していた時代であり、とくに家康が三河で苦労してきたことが影響していたとされます。もっともこの規制は2代光友のときには解除され、南寺町に東と西の本願寺の大きな別院がつくられています。また碁盤割町人地内にできた閑所にも真

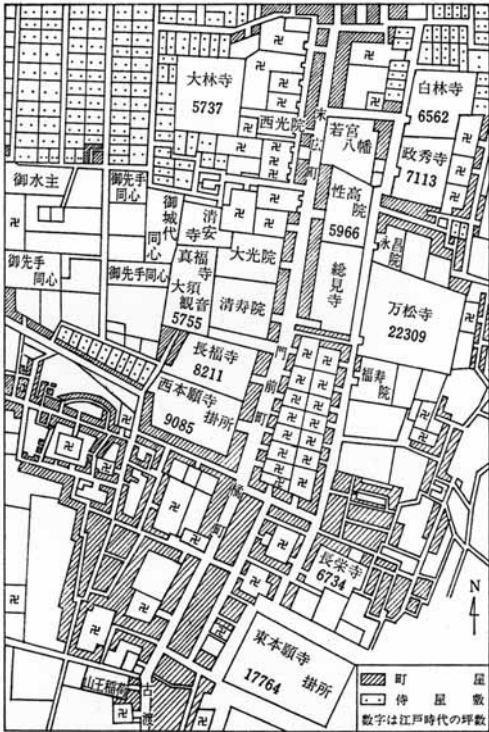


図2 1800年頃の南寺町(数字は坪数)

慶長15年主要寺院の配置						(寺域の単位は坪)	
宗旨	寺名	寺域	宗旨	寺名	寺域		
〔南寺町本町筋東側〕			真言宗	真福寺	5755		
臨濟宗	白林寺	6562	〃	長福寺	9085		
〃	政秀寺	7113	〔東寺町〕				
〃	総見寺	9047	曹洞宗	含笑寺	3094		
〃	勝鬘寺	2743	〃	梅屋寺	1424		
〃	法光寺	不詳	〃	安斎院	1203		
〃	慈雲寺	不詳	〃	永安寺	2254		
曹洞宗	万松寺	22309	〃	照運寺	1070		
〃	永昌院	423	〃	徳吉寺	1863		
〃	万年寺	844	〃	宋福寺	1732		
〃	福壽院	717	〃	正久寺	1035		
〃	善篤寺	1596	〃	立本寺	1065		
〃	久宝寺	1851	日蓮宗	本正寺	2007		
〃	淨久寺	1495	〃	浄正寺	1329		
〃	宝泉院	1077	〃	本要寺	1653		
〃	光昌寺	936	〃	妙住寺	1746		
〃	建昌寺	987	〃	本妙寺	1926		
〃	天寧寺	1090	〃	大法寺	1655		
〃	金徳院	1038	〃	法輪寺	1479		
〃	功徳寺	1038	〃	法照寺	1079		
〃	竜雲寺	6734	〃	法華寺	1444		
浄土宗	性高院	5966	〃	法華寺	2732		
〃	梅光院	2816	〃	常徳寺	2777		
〃	栄国寺	4347	〔東北方面分散寺院〕				
〔南寺町本町筋西側〕			浄土宗	高岳院	7371		
浄土宗	光明寺	1440	〃	遍照院	1428		
〃	養林寺	2635	〃	祖光寺	1312		
〃	西光院	1297	日蓮宗	大平院	1924		
〃	阿弥陀寺	1256	浄土宗	禅隆寺	1798		
〃	極楽寺	1314	臨濟宗	長久寺	792		
〃	徳林寺	1417	真言宗	不詳			

図3 江戸時代初め頃の城下主要寺院の配置と規模。宗派毎にまとめられている(文献③)

宗系の寺院が多く入りました。寺町は、城下の周辺の街道沿いに配置されたため、城の防衛拠点だったといわれます。しかし名古屋の場合、その位置から考えると戦闘の拠点というより、むしろ援軍の駐留拠点(パーク)と見たほうがいいでしょう。広い境内が与えられたのもそのためもあったのではないのでしょうか。

なお、江戸時代の絵図には東北に建中寺や高岳院など大きな寺が点在し寺町ようですが、これは後にあるいは特別に土地を求めて立地したものです。

(3)開放された町

近世になってつくられた名古屋城下にはそれまでの城下町とすこし変わったところが出てきました。一つは武家地と町人地の区分です。戦国時代の後半、身分制が徹底するとともに武士と町人は明確に区分されるようになっていました。それが名古屋城下では大きなゾーンでの住み分けはあるものの、相互に入り込

み、軒を接するような所も見られるのです。

いま一つは、町と村との境です。戦国時代後半の城下では、城下町は「惣構え」という堀や土塁で囲まれ、入口には門があって、城下とその外とは明確に区分されていました。しかし名古屋城下はこの惣構えを築くことなく終り、道路の入口に警備のための木戸があるだけという簡素なものになりました。もっとも、惣構えが造られた多くの城下町でも、その後、堀や土塁は取り払われており、今日ではほとんどが分らなくなっています。

以上のように、名古屋城下は、近世城下町の総仕上げともいえる、いわば開放型の城下町がつくられたということができるのです。

3 絶行 武家地から東寺町へ

… 町割が残った市街地 …

名古屋の街には、今も、江戸時代の町割がいつも残されています。今回は、前回の碁盤割地区と並んで、顕著に残っている東の武家地と東寺町を訪ねてみたいと思います。

〈武家地から〉

地下鉄の市役所駅の2番出口を出て、市役所の横を東に進みます。道が左にカーブする所が三の丸の東御門の跡になります。すこし行くと堀があります。この付近にあった城門の枳形は、明治時代末に瀬戸電気鉄道が造られる時に部分的に取り払われています。

歩道を左に、信号を渡って東に進みます。この道が御門を出て東に伸びる武家屋敷地の主要道路でした。左側はその先が台地の端になるため家老の中屋敷などがつくられ、一般の武士の屋敷は道の南になります。2つ目の信号のすこし手前で北に向かう道が中山道に向かう木曾街道で、その入口には志水口の木



東御門跡から三の丸の北側の堀を見る



上中級武士の屋敷町の1つ、白壁筋。
落着いた家並がつづく



主税筋。築城前からの街道だったとされる

戸が作られていました。

大きな清水口の交差点を渡り右に曲ります。ここから東南の中級武士の屋敷町には、北から白壁、主税、榎木とよぶ三つの筋が通っていました。次の道がその白壁筋になります。入ると異次元に入ったような静けさです。この筋は3本の中でも最も上級で、1街区は6つに分けられています。料亭の残る道を進み、次の角を右に曲ります。次の主税筋は名古屋城築城の前からの道で、三の丸内の中小路に続いた道でした。この筋は1街区が8つに分けられていますが、それでも1宅地が600坪近くあります。通り過ぎて次の榎木筋に行き



榎木筋の南にある山吹谷公園。
昔は川が流れ、山吹の名所だったとされる

ます。西南が公園になっていますが、江戸時代には「山吹谷」と呼ばれ、川が流れて花見の場所だったようです。南に向けて下っているのが分かります。角を左に曲がると、次の信号の道は明治以後に出来ています。斜め向こうに、家老屋敷地区にあった川上貞奴の二葉御殿を移転復元した館が目を引きま

す。その道を南に曲がると、幹線道路を渡った次の道が善光寺街道です。この東西の通りは碁盤割地区の茶屋町筋の延長に当たり、西は五条橋から東は代官町まで続く連続した街道筋の町人町でもありました。

〈東寺町へ〉

まっすぐ進むと、広い桜通の少し手前から寺町がありました。信号を渡った向こうの通りが少し斜めになっているのは、古い寺町の通りを残したからです。この寺町も今ではポツン、ポツンと寺があるだけですが、これは寺が小さくなったためでしょうか。とくに戦災復興では墓地が郊外に移されたため、空き地が出来ました。その跡に娯楽施設がつくられ、今では多くが駐車場に変わっています。

斜めの道を進むと寺町の名残はあり、都心のわりに緑も豊富です。この通りは浄土宗もありますが、曹洞宗が多かったため禅寺町と呼ばれました。東西と南北にできた新しい道を渡りながら進むと斜めの道の元になった飯



国道19号の東は藩主の下屋敷があった。
今は大型の開発地に

田街道に出ます。寺町はこの南にも続いていましたが、左に曲がりすぐの錦通を東に次の道を左に戻ります。この道は日蓮宗の通りです。寺、娯楽施設、駐車場の組み合わせが目立ちますが、最近ではレストランが進出しています。次の広い通りの西南角に石碑がありました。法華・寺町を示すもので、ここには18ヶ寺の日蓮宗の寺があったことがわかります。右に曲るとすぐ広い国道19号です。この寺町の東には2代藩主光友の時、大きな下屋敷が作られました。戦後大きな開発が出来たのはそのためでしょうか。南に行き、交差点を渡ると地下鉄新栄駅の出入口があります。

4 援軍の道

1612年、家康は岡崎から名古屋への近道を探して北進しました。そして今の天白区の平針に着いたところで村の長を呼び、街道の伝馬役を命じました。こうして開かれたのが城下と岡崎を結ぶ岡崎街道です。この道は、家康にとっては、一担事あるときには名古屋に駆けつける援軍の道でした。またもし伊勢湾の制海権を奪われた時はその代替の道にもなる、いわば東海道バイパスだったのです。

その街道が城下に入る所に寺町がつくられました。東海道からの南寺町。そして東海道バイパスからの東寺町。もし仮に名古屋決戦があれば、これらの寺町は大軍の駐留地となったでしょう。現に大坂の陣の時には、この道を大坂に向かう徳川軍が通り抜けたのです。

〈主な参考文献〉

- ① 同編集委員会『新修名古屋市史③』（1999、名古屋市）
- ② 高橋他編『図説日本都市史』（1993、東京大学出版会）
- ③ 芥子川律治『家康がつくった革新名古屋』（1977、地産出版）



寺、娯楽施設、駐車場が目立つ旧寺町



「法華寺町」の碑の立つ日蓮宗の寺町。
表通りには寺は少ない